『理論と動態』特定非営利活動法人社会理論・動態研究所　10:42-56　2018.1　査読有

国家とインフォーマリティ――都市の空間戦争のなかで

1　資本と都市

1.1　空間戦争

都市は、資本の利潤の狩場である。国家・自治体（以下国家）[1] は、資本を都市へ誘う。利潤の狩場（法と制度）を整える。過剰な狩りを抑制し、利潤を再配分する。グローバル都市では、この狩りが国境を跨る。

資本は自己増殖する。それは資本の本性である。資本は、たえず新たな狩場を開拓する。狩場の開拓は、都市の開発である。その方途は 2 つある。一つ、新たな狩場を創出する（都市の外的拡張）。二つ、既存の狩場を再生する（都市の内的拡張）。国家は、資本の狩りに伴走する。あるときは狩場の開拓を膳立て、あるときは狩りの軋轢を調整する。

都市の開発は、空間の再編である。しかしその空間には、人間がいる。狩る人間と狩られる人間。資本（と国家）を担う人間と、生活を営む人間。都市の狩場で、一方は利潤のため、他方は生存のため対峙する。交渉し、闘争する。それは、都市の空間戦争（space war）[2]である。結果は明らかである。資本（と国家）の力は強い。一方が空間を占領し、他方が敗退する。そして空間が狩場に変わる。代行者が空間を監視し、出入りする人間を選別する。

産業国と発展途上国（以下途上国）を問わず、都市に空間戦争がある。その主戦場はグローバル都市 [3]である。そして戦争の勝者が、国境を越えて侵攻する。

1.2　課題と構成

都市の空間戦争をどう捉えるか。従来の理解はそれでいいのか。なにが不十分で、なにを加えるべきか。世界の都市研究で、空間戦争をめぐり、議論が沸騰している。いわば空間戦争の戦争、都市理論の戦争の状態である。理論戦争の鍵概念は、ジェントリフィケーションとインフォーマリティ（非公認・非合法であること）である。両概念について論じる先行研究は多い（その一部は、本稿末尾の「参照文献」に掲げた）。両概念は、都市（再）開発をどう説明するのか。どんな空間戦争を描くのか。

本稿の主題は、インフォーマリティ論の開拓にある。本稿は次の構成をとる。まず、N・スミス（Neil Smith）の理論をテキストに、ジェントリフィケーション論を整理し、議論する（Smith, 1996=2014）。ジェントリフィケーション論は、インフォーマリティ論の必須の前提である。ジェントリフィケーションは、都市空間をフォーマリティ／インフォーマリティに分割する。それはインフォーマリティを創出し、インフォーマリティはジェントリフィケーションを喚起する。次に、A・ロイ（Ananya Roy）のインフォーマリティ論（Roy, 2005; 2009）をテキストに、また、筆者が読んだ範囲で彼女に続く研究を参照し、インフォーマリティ論を整理し、議論する。ロイは、インフォーマリティ論のラディカルな展開を図り、都市研究に衝撃を与えた。本稿は、ロ

イに発するインフォーマリティ論の批判性と革新性を評価する。そのうえで、若干の論点について議論する。もって、インフォーマリティ論の批判性と革新性を補強する。最後に、ポストコロニアリズム批判とインフォーマリティについて論じる。ポストコロニアリズム批判は、ロイらのインフォーマリティ論の基底をなす。そこで、インフォーマリティ概念の転倒の意味を問い、インフォーマリティ論のさらなる展開可能性をみる。もって本稿の結語となす。

2 ジェントリフィケーション論

2.1 ジェントリフィケーション

ジェントリフィケーションとは、都市底辺層の居住地区が再開発され、そこへ富裕層が流入して、居住者の構成や地区の構造が変容する、都市空間の再編過程をいう。ジェントリフィケーションは、これまで、インナーシティの再開発を指す語としてあった。しかし、その対象地区は、インナーシティに限らない。郊外を含めて、都市全域の衰退地域や無住地が都市開発の対象になる。また、衰退地区は居住地区だけではない。寂れた商業地区や工場地帯も、開発の対象になる。グローバル経済のもと、土地投資が進み、都市全域が開発の対象となっている。ゆえに、ジェントリフィケーションを、インナーシティの再開発に限る必要はない。それは、空間が開発され、人間が交替する過程の全体を指す概念へ拡張されていい[4)]。

ジェントリフィケーションは、都市開発の鍵概念になった。グローバル経済のもと空間再編が進み、ジェントリフィケーションは「自然の」光景になった。そしてそれは、都市再生の象徴とされた。不潔・乱雑・病理の荒廃地区から清潔・秩序・健全の再生地区へ。衰退地区から繁栄地区へ。ジェントリフィケーションを賛美するイデオロギーが開花し、豊かな未来都市が約束された[5)]。しかし、ジェントリフィケーションは、深刻な社会問題を生んだ。資本の土地投資と空間管理が進んだ。国家は、公共空間の私有化を進めた。無住地でないかぎり、ジェントリフィケーションは、土地の占有者の交替を伴う。交替は、しばしば暴力的な排除となる。そして、空間の占有者や利用者が選別される。ホワイトカラーの仕事空間（オフィス街）、富裕層の居住空間（ゲーテッド・コミュニティやサブディヴィジョン）、ショッピングを楽しむ人々の消費空間（専門店街など）。不潔・乱雑とされ、富に無縁な人々は、これらの空間に立ち入れない。こうして、空間の占有者や利用者が、同質化されていく（空間利用の階層的純化 spatial purification）（Speak, 2013: 8）。それは、街頭や公園などの公共空間も例外ではない。街頭や公園で、ホームレスや物売りが選別される。ホームレスや物売りの排除・選別・管理（交渉・抵抗・妥協・退去・排除）の研究は、すでに多い。それらの研究は、街頭の空間戦争を分析している。それは、不均衡な力関係にある諸アクター間の利害と、「空間の意味」をめぐる闘争である。また空間の変容は、生活の変容である。生活の変容は、意味世界の変容である。ジェントリフィケーションは、人間に、空間・人間・意味丸ごとの（根扱ぎの）変容を迫る。

2.2 ジェントリフィケーションの動因

だれが、どこを、なぜジェントリファイするのか。この問いに明確な解を出したのは、N・スミスである。スミスは、ジェントリフィケーションを、都市空間をめぐる資本循環（資本の引揚げと再投資）[6)]の一過程である

とした。ジェントリフィケーションの動因は、「資本還元された地代と潜勢的地代の格差」（Smith, 1996=2014: 392）にある。潜勢的地代とは、「土地のもっとも高度かつ最良の利用のもとで――そこまで言わないにしても少なくともより高度でよりよい利用のもとで――資本還元されうる量」（Smith, 1996=2014: 106）をいう。「資本は、利益率がもっとも高い場所へと流入する。そして、絶え間ないインナーシティの価値摩損を伴う資本の郊外への移動は、結果として地代格差を生み出す。地代格差が充分に大きいところまで広がるとき、それまでは他所で獲得されていた利益率を得るべく改修（あるいは再開発）の取り組みがはじまり、資本のフローが回帰する」（Smith, 1996=2014: 119-120）。資本は、利潤を求めて、利潤率がもっとも高い場所を創出する。しかし、そこには人間がいる。資本は、その人々を除かなければならない。そこで資本は、イデオロギーを動員する。フロンティアと「報復」のイデオロギーである。都市再生と夢ある未来都市。都市フロンティアの神話は、ジェントリフィケーションが生じる「社会的な分化と排除を、自然な過程あるいは不可避な過程として人々に理解させる」（Smith, 1996=2014: 39）。ジェントリフィケーションには、崇高な目標がある。それは、「ミドルクラスや支配階級の白人」が、「人種／階級／ジェンダーの恐怖にかられ」、それら都市空間の「盗っ人」による「市民の道徳、家族の価値、近隣の安全の破壊」に対して行う報復戦争である（Smith, 1996=2014: 352）。こうしてスミスは、ジェントリフィケーションに、攻撃を仕掛ける富裕層と仕掛けられる底辺層の対立と闘争をみる。「ジェントリフィケーションは階級闘争だ！」（Smith, 1996=2014: 3）。

スミスのジェントリフィケーション論は、論理明快である。スミスは、都市における資本循環のなかでジェントリフィケーションを捉えた。スミスはいう。「インナーシティの衰退とはより一般的な都市圏の拡張、とりわけ郊外の開発の裏面なのである」（Smith, 1996=2014: 142）。スラムの形成・再開発と郊外の開発は、資本の循環の二局面である。つまり、スラムの形成も資本が意図した結果である。スラム（底辺地区）と郊外（富裕地区）を同じ土俵に収める。このようなスミスの視座は、革新的である。

2.3　ジェントリフィケーション論からインフォーマリティ論へ

スミスのジェントリフィケーション論には、2 つの補充が必要となる。一つ、国家について、二つ、政治過程についてである。それらの補充は、ジェントリフィケーション論から、本稿の主題であるインフォーマリティ論への橋渡しとなる。

スミスは、フィラデルフィアのソサエティヒルの再開発を事例に、ジェントリフィケーションにおける国家の役割に言及した。ジェントリフィケーションの「計画を実行に移すうえで再開発機構が担った主たる任務とは、政治的コントロールであった」（Smith, 1996=2014: 208）。そしてスミスは、「国家・自治体の関与とは都市のエリート企業に金融的利益をもたらすための触媒にすぎなかった」（傍点は引用者）（Smith, 1996=2014: 210）と論じた。しかしここで、補足が必要になる。たしかに国家は、資本の触媒・介添えの役を担う。とはいえ、国家の力は強大である。ジェントリフィケーションの経済過程では資本が主役となり、政治過程では国家が主役となる。資本は、国家の膳立てなしに都市を利潤の狩場にできない。国家は法と規制を定め、資本は、それに則ってジェントリフィケーションを行う。また国家は、公有地を資本に供与する。資本がそれを開発する。さらにジェントリフィケーションは、空間に関わる諸アクター

間の政治過程である。国家は、その政治過程を主導する。こうして、国家の機構・意思・政治の分析は、ジェントリフィケーション論にとって必須の課題となる。その役割は、「触媒」をはるかに超える。

次に、政治過程についてである。ジェントリフィケーションは、諸アクターの交渉・闘争・合意・決裂の過程である。ここで諸アクターとは、国家・開発業者・企業・居住者・市民などを指す。その人々は、富裕・中流層、労働・底辺層などの階級的意思を代行する。スミスは、ジェントリファイする側、つまり、資本の利害を代行する人々の意思決定過程について詳論した。しかし、ジェントリファイされる側（居住者や占有者）の意思決定過程については、「ニューヨークのホームレス戦争」（Smith, 1996=2014: 364-389）についての若干の記述を除いて、十分に踏み込まなかった。ジェントリフィケーションが階級闘争であるとすれば、ジェントリファイする者／される者の交渉・闘争・合意・決裂の過程自体の分析が重要となる。そこでは、国家・資本・住民・市民がともに主役となる。

ジェントリフィケーションにおける国家と政治過程の分析は、インフォーマリティ論の主題に直結する。インフォーマリティ論は、都市空間のフォーマリティ／インフォーマリティの分割が、諸アクター間の交渉により決まること、そのとき国家が主導的な役割を果たすことを強調する。スミスのジェントリフィケーション論は、空間開発の主体・過程・結果の経済過程を中心に、ロイらのインフォーマリティ論は、それを空間分割の政治過程（空間占有の正当性をめぐる闘争）を中心に分析する。ジェントリフィケーションには政治（国家の意思）が介在し、フォーマリティ／インフォーマリティには経済（資本の意思）が介在する。こうして、ジェントリフィケーション論とインフォーマリティ論は、対照的補完の関係にある。最後に、ジェントリフィケーションもインフォーマリティも、インナーシティを超えた都市全体の変容に関わる。ゆえにその理論は、個別理論ではなく、現代都市研究の全体論な（holistic）視座と枠組を提示すべき責を負う。

3 インフォーマリティ論

3.1 フォーマリティ／インフォーマリティ

インフォーマリティは、これまで、過剰都市化論のなかで、途上国都市のスクオッター研究の鍵概念とされてきた。そこでインフォーマリティに、次のような性格が付与された。一つ、偶発的・非意図的・非政治的に形成された空間である。農村出身の困窮者が、都市で住む所がなく、公有・私有の土地に家屋を建てて住む。これがスクオッター（インフォーマル・セツルメント）である。それは自然の現象であり、土地の占有に政治的な意味はない。二つ、非正当で非合法の空間である。人々は、土地の所有者に無断で住んでいる。そこに住むことの正当性も、法的な居住権もない。三つ、国家の統制が及ばない空間である。ゆえに、人々は税を納めない。四つ、非公認の空間である。国家は、人々が住む空間を公認しない。ゆえに、そこに住所はない。行政の末端組織である町内会もない。五つ、政治的・社会的な凝離空間である。空間の境界には、人々の生活を分断する見えない壁がある。・・・このような空間を、研究者は、都市の周縁にあって排除され、人々の生活が丸ごと隠蔽された空間とみなした（Porta, 2014）。この対極にあって、意図的に形成され、政治的に掌握され、法的に公認された空間が、フォーマルな空間である。フォーマルな空間とは、合法的に所有された正当な、国家に予測と統制が可能で、徴税が可能な空間である。このような空間を、研究者は、都市の中心にあって都市に包摂され、人々の生活が丸ごと承認さ

れた空間とみなした。そして都市が、このインフォーマリティとフォーマリティの対抗図式のなかで描かれた。そこで、インフォーマルな空間は、フォーマルな空間へ統合されるべき空間とされ、それが、都市の近代化の必須の条件とされた。

しかしグローバリゼーションのもと、都市の経済・政治・社会構造が変容し、フォーマリティ／インフォーマリティは、単純な話でなくなった。だれが、どのようにインフォーマルな空間を創出するのか。そのとき、フォーマルな空間はどうなのか。そこにどのような都市・権力・政治が介在するのか。そのとき、だれがフォーマリティやインフォーマリティを定義するのか。今や、インフォーマリティ論は、都市変容の全体を射程に入れた、権力・政治の隠蔽された恣意と暴力を暴く、必須のイシューとなった。そこへロイらが介入した。そして、従来のインフォーマリティ論を劇的に転倒した。以下、ロイらの先行研究を参照して、インフォーマリティ論の要点を紹介する [7)]。そして、筆者のフィリピン・マニラ調査による知見を挟んで解釈し、留意すべき問題点を指摘する。

3.2　国家とインフォーマリティ

インフォーマリティは、まずは法的概念である。インフォーマリティは、非合法と同義である。法の決定・裁定者は、国家である。国家は、みずからを法の外（例外状態）に置いて法を定め、法を執行して、その結果を裁定する（Agamben, 1995=2003）。それは、インフォーマリティも例外ではない。都市空間のどこがどのようにインフォーマルなのか。その裁定は国家の手中にある。そこには、以下の事柄が含まれる。

国家のインフォーマリティ

国家は、空間のフォーマリティ／インフォーマリティを線引きする [8)]。フォーマリティ／インフォーマリティは、国家の統制の函数である。国家は、その利害関心に照らし、都合に応じて空間をフォーマリティ／インフォーマリティへ分割する。いつどこがどのようにフォーマル空間、またはインフォーマル空間とされるのか。その国家の恣意的な決定可能性は、国家の権威と権力の基盤である。国家は、しばしば法の逸脱を公認し、正統なものを括弧に入れ、非正当なものを押し出す。そして、インフォーマリティを創出する。それにより、国家は存続可能となる。スクオッターは、不要で目障りな空間ではない。それは、国家の住宅政策を補完する空間である。スクオッターなくして、国家は秩序の維持が叶わない [9)]。ここから、次のことがいえる。インフォーマリティは、国家の従属変数であり、国家統治のツールである。それは、国家の恣意によりたえず変容する。ゆえに、フォーマリティ／インフォーマリティの境界も、たえず変容する。

マニラに、スモーキー・マウンテン（Smokey Mountain）というスクオッターがあった。人々は、居住権の獲得をめざし、歴代の政府と交渉を重ねた。マルコス政権は、居住を保証して、人々に証書を与えた（そのため筆者の友人は、独裁者マルコスの熱烈な支持者であった）。その背景には、政権の危機的状況があった。その後の政権で、証書は無効にされた。人々は、証書を根拠に、政府に居住の正当性を訴えた。しかし効がなかった。その後もスモーキー・マウンテンは、幾度かの強制撤去を受けた。その度に、居住者は戻り、バラックを建てて、交渉を再開した。そして 1998 年に、最終的に撤去された。こうして国家は、インフォーマル空間の公認と無効化を繰り返した。

選択的インフォーマリティ

国家は、インフォーマリティを創出する。そのとき国家は、インフォーマリティを選択的に創出する。[10)]。ある空間は、公認され、フォーマル化される。別の空間は、公認されず、インフォーマル化される。また、あるインフォーマル空間は公認され、別のインフォーマル空間は、公認されない。公認されない空間は、周縁化され（法から排除され）、悪魔化される（問題空間であると烙印を押される）。

店舗を構えた商店は、街路に商品を並べても、しばしば容認される。つまり、フォーマルな主体のインフォーマリティは、許容される。しかし、街路の物売りは、容認されず、規制される。つまり、インフォーマルな主体のインフォーマリティは、容認されない。また、資本がある物売りは、警察官や取締官に罰金を払い、賄賂を与えて、商売を容認される。資本がない物売りは、罰金や賄賂の金がない。警察官や取締官は、小遣いが稼げない。ゆえに排除される。つまり、インフォーマルな主体が、さらにフォーマリティ／インフォーマリティに分割される。そのとき、資本や交渉力が分割の決定因となる。最後に、国家が必要とするとき、たとえば国際会議が開催されるとき、資本がある物売りもない物売りも、街路から一掃される [11)]。そのとき、政治が経済に優先する。

富裕層のインフォーマリティ

インフォーマリティは、これまで、底辺層の居住空間を指すものであった。しかし話は広がる [12)]。インフォーマリティは、国家により創出される。その過程に、底辺層だけではなく、富裕層も関与する [13)]。インフォーマリティは、都市全体の再編のなかで、創出される。富裕層も、インフォーマリティを創出する。たとえば、郊外の公有地を占有して分譲地を造成する。街路や公園を浸蝕してゲーテッド・コミュニティをつくる。このようにインフォーマル空間は、都市の周縁空間だけではない。それは、都市全域へ広がる。底辺層は、公共空間の無断使用により、富裕層は、公共空間の市場化によりインフォーマリティを創出する。富裕層は、富と政治力をもつ。賄賂を贈って役人を抱き込む、弁護士を雇って法を操作する。そして国家と交渉する。ゆえに、富者のインフォーマリティは、容易にフォーマル化される。他方で、底辺層は富も政治力もない。ゆえに、そのインフォーマリティは、据え置かれる。

脱統制のインフォーマリティ

インフォーマリティは、これまで、国家の統制が及ばない、つまり統制外にある（*un*-regulated）空間とされてきた。それは、無規則の、構造化されず、予測が困難な空間であった。国家が底辺層に怯える理由は、そこにあった。しかし、事実はそうではない [14)]。インフォーマリティは、統制の欠如ではなく、統制の一形態である。それは、都市計画の失敗の産物ではなく、国家の計算づくの、予定の産物である。国家は、都市戦略に照らして意図的に空間の統制を行わない。これを脱統制（*de*-regulated）と呼ぶ。国家は、さまざまな規制を設け、それらを適用しないで（extralegal）、空間をインフォーマルな状態に留めおく。また国家は、統制の網を張り巡らせて、空間を統制が必要でない状態に置く。これを過統制（*over*-regulated）と呼ぶ。このように、フォーマリティ／インフォーマリティは、統制の外ではなく、統制

の内で、合法／非合法、公認／非公認に分割されたものである。

たとえば国家は、ホームレスを表の街路から一掃して、ビルの合間や裏の小路に押し込める。そして、それらの空間を規制しないで、ホームレスの自由な生活空間とする（脱統制）。こうして国家は、ホームレスを市民から不可視化する。また国家は、繁華街で厳格な道路規制を敷く（過統制）。そして、ホームレスをいつでも排除できる状態にしておく。そのうえで、ホームレスが物乞いするのを黙認する。

3.3　インフォーマリティの構築

インフォーマリティは、空間に関与する諸アクター間の交渉の産物である。それは、諸アクターが相互作用的に構築するものである（Villamizar-Duarte, 2015: 2, 24）。インフォーマリティが構築物であるとは、次のことをいう。

交渉のインフォーマリティ

国家機構は、諸々の行政部門からなる [15)]。行政部門が都市計画を策定し、まず内部で交渉し、次に外部の諸アクターと交渉する [16)]。都市計画には、諸アクターが関与する。行政部門、開発業者、地主、企業、消費者、居住者、市民・・・。これらのアクターが都市計画に参入し、幾重もの交渉を経て、それぞれの役割と権利を獲得する。交渉には，フォーマルな交渉と、インフォーマルな交渉（慣行としての賄賂や恩顧）がある。都市計画は、このような政治環境のなかで進められる。それは、合法／非合法、公然／非公然、正統／非正統の、つまり、フォーマリティ／インフォーマリティの闘争と駆引きの過程である。

ここで留意すべき事柄がある。一つ、諸アクターの間の交渉を主導するのは、国家である。まず、国家機構のなかで交渉が行われる。行政部門の間の価値や利害は、しばしば対立する。しかし最後は、そのギャップは、国家の意思として調整される。次に、行政部門が、外部のアクターと交渉する。そこでも最後は、国家の意思が、交渉の行方を決する。二つ、交渉には、富裕層の交渉と底辺層の交渉がある。富と政治力をもつ富裕層は、国家機構の上層部から交渉を始める（トップ・ダウン）。富と政治力が乏しい底辺層は、国家機構の下層部と交渉し、上へ這い上がる（ボトム・アップ）。富裕層にとってロビー活動は、問題解決のツールの一つである。底辺層にとっては、問題解決の最後のツールである。交渉は、残された唯一の「弱者の武器」（Scott, 1985）となる。

インフォーマルな国家

交渉する諸アクターの至高の位置にあるのは、国家である [17)]。国家自体が、統一的な実体ではなく、行政部門に分割されたアクターの集合体である。国家の内部で、それらが競合・離反して、価値や利害が調整される。それは、縦横に錯綜した交渉の過程である。ここでは国家が、インフォーマル化された実体として [18)]。そこには 4 つの含意がある。一つ、国家は、外部にインフォーマリティを創出する。二つ、国家は、インフォーマリティを内包する。三つ、内部のインフォーマリティは、外部のインフォーマリティと連続する。四つ、そのうえで国家は、個々の意思を統合し、統一的な意思を構築する。そうしてこそ、国家は、フォーマルな支配と統治の主体となる。

スクオッター対策には、しばしば、行政部門の意思のずれがある。都市の美化と環境改善を担当する行政部門（環境衛生局など）は、スクオッターの撤去を優先させる。居住者の生活保障を担当する行政部門（福祉援護局など）は、居住者の生活保障を優先させる。国家内部で、それらは対立する。しかし、どれほど対立が大きかろうと、結局、国家の意思は一つである。つまり、スクオッターを撤去するか、しないかである。居住者にとっては、スクオッターを退去するか、留まるかである。美化と環境改善の力が勝れば、スクオッターは撤去される。居住者の生活保障の力が勝れば、スクオッターは容認される。いずれであれ、それは、国家の意思の表出である。居住者の選択肢は、2 つしかない。出ていくか、留まるか。

連続するインフォーマリティ

国家は、フォーマリティ／インフォーマリティの境界を決める。しかし双方の境界は、流動的である。フォーマリティ／インフォーマリティの境界は、交渉の過程で変容する。また、インフォーマル空間が、法的には非公認であるが、慣習的には公認されたりする。L・ドラモンド（Lisa Drummond）は、非合法の居住ながら、居住が慣習的に認められた公共空間を「擬似公共空間」（pseud-public space）と呼んだ（Drummond, 2000: 2377）。M・ラコ（Mike Raco）は、公共空間と私有空間の境界が曖昧な空間を「混成空間」（hybrid space）と呼んだ（Raco,2003: 1871）。個人や集団がもつ富と政治力の大きさは、国家との交渉に動員されるインフォーマルなツールの必要・範囲・効果の度合を決める。ゆえに、フォーマリティ／インフォーマリティは、画然と分割された実体ではない。それは、程度の問題であり、「それぞれを両極となす連続体」（Mcfarlane & Waibel, 2012: 2）のうえにある。フォーマルな空間においてインフォーマルな慣行が機能し、インフォーマルな空間においてフォーマルな規則が機能する。フォーマリティ／インフォーマリティは、多次元・多領域において、対立して連続し、分離して重複し、固定し交替しあう。いつどこでそれぞれが生じるのか。それを決めるのは、国家である。

マニラのビジネス街マカティ（Makati）は、街路の取締りが厳しい。その街路で、弁当売りが、ビルのオフィスに入って弁当を売る。また、会社員が街路の屋台で食事をする。こうして、フォーマル空間にインフォーマル空間が現れる。また、上述のスモーキー・マウンテンで、人々は、配電を求めて、電力会社（Manila Electric Company）と交渉した。電力会社は、料金をきちんと払うという条件で、スモーキー・マウンテンへの配電を認め、設備を設けた。人々は、合法的に電気を得るようになった。こうして、インフォーマルな空間にフォーマルな空間が現れた。いずれも、国家の容認のもとでの出来事である。

4 ポストコロニアリズム都市理論

インド出身のロイと、彼女に続く研究者のインフォーマリティ論は、途上国の都市をコロニアルな状態にあるとするポストコロニアリズム都市理論を基盤とする。それは、西欧の都市を範とする都市理論の普遍妥当性を否定し、その途上国都市への適用可能性を否定する。ロイらのインフォーマリティ論は、このような批判的都市理論の系譜にある。最後に、批判的都市理論の観点から、インフーマリティ論の意義を再考し、その理論的射程についてみる。

ロイらのインフォーマリティ論は、西欧都市をモデルとする都市研究のオリエンタリズムを批判する。西欧

の都市研究において、世界の都市は二項対照され、本質化される。一方に、前近代的で、底辺層が都市空間の大部分を占める都市があり、それはメガシティと呼ばれる。途上国の大都市である。他方に、超・脱近代化され、人々が豊かな経済と先端的テクノロジーを享受する都市があり、それは、グローバル都市と呼ばれる。産業国の大都市である。この二項対照のなかで、途上国の都市が、暗黒の影の都市（shadow city）（Roy, 2009: 84）として他者化される。フォーマリティ／インフォーマリティの固定的な理解は、このような都市理論の延長にある。そして、「インフォーマリティは、貧困、マージナリティ、違法性、サバルタン集団と同一視される」（Demitas-Milz, 2012: 48）。

ポストコロニアリズム論は、このような都市理解を批判し、そこからインフォーマル論を展開する、そこで、西欧型インフォーマリティ論が批判される。要点は、4つある。一つ、西欧的な近代化論や開発論に基づく都市理論を、途上国都市へ適用することはできない（Storper & Scott, 2016: 1120）[19]。二つ、フォーマリティ／インフォーマリティの二項対照は廃棄すべきである。インフォーマリティは、底辺地区に固定された実体的空間ではない。三つ、諸アクターのなかで、国家が至高の権力（交渉力）をもつ。四つ、インフォーマリティは、底辺層の居住空間に特定されない。それは、富裕層の商業・居住空間を含む都市全体で生起する。「インフォーマリティは、都市化の一般的な様式になった」（Roy, 2005: 47）。

途上国都市の差異性の強調、都市研究の戦略概念としてのインフォーマリティ、国家の役割の強調。これが、批判的インフォーマリティ論の特徴である。ところで、このように途上国都市の差異性を強調するだけでいいのか。そうすると、都市像の全体が見えなくなる。では、どうすればいいのか。つまり、都市像の普遍性と個別性の関係はどうなのか。西欧都市理論の普遍化を批判して、途上国都市の差異性を強調すれば、ふたたび本質主義に陥る惧れがある。途上国都市もインフォーマリティも、無限に多様である。その点に関わって、M・ストーパーらは、次のようにいう（Storper & Scott, 2016: 1120）。途上国研究の側から、西欧都市のインフォーマリティを説明することは可能である。途上国都市には、歴史的な優位性がある。途上国都市は、西欧都市を範とする植民都市の経験をもつ。「アジアの都市の歴史的経験は、南北という二項対立を脱構築する点で、優位な位置にある」（Shin, 2016: 456）。しかしそれだけでは、普遍的なインフォーマリティ論の構築は叶わない。要は、個別性と一般性の関係という、論理の問題だからである。

グローバル都市において、フォーマリティとインフォーマリティには、つねに「混成的交差」（hybrid interplay）（Altrock, 2012: 179）がある。ゆえに、ジェントリフィケーションは、つねに「混成的」である。では、その混成状態は、産業国都市と途上国都市でどう異なるのか。ここで問題は、こうなる。認識の本質化と論理の固定化を戒めつつ、産業国都市と異なるかたちで、途上国都市の個別性と一般性を組み合わせる（その逆も）。そのためには、途上国／産業国都市それぞれの、フォーマル／インフォーマリティの混成状態を分析する枠組が必要となる。ロイらのインフォーマリティ論の批判性を確保しつつ、産業国都市のインフォーマリティを包摂する理論に到達するには、このような「比較の方法」が必要となる[20]。

5 批判的都市理論の展開

ロイらのインフォーマリティ論は、途上国都市の解放論であった。その解放には３つの含意がある。一つ、途上国都市を貧困と不法（無秩序）の都市とみなす、「他者のまなざし」から途上国都市像を解放した。それは、支配的な負の都市像の転倒である。そのことは、ポストコロニアリズム都市理論の使命であった。二つ、インフォーマリティの構築性を説き、同時に、そこでの国家の権力性を浮きぼりにした。インフォーマリティ論は、国家と権力の問題を都市研究の中心に据えた。三つ、インフォーマリティを底辺層の占有物であることから解き放し、富裕層を含む都市全域に関わる問題へ押し上げた。つまり、インフォーマリティ論を（批判的）都市理論へ押し上げた。

本稿は、スミスのジェントリフィケーション論、続けてロイらのインフォーマリティ論の要点を整理し、議論を行った。資本は、都市開発の基底的主体である（経済過程）。国家は、都市開発の実践的主体である（政治過程）。それらが共演する場面が、ジェントリフィケーションである。そこで、フォーマリティ／インフォーマリティの境界が、設定または再設定される。しかしスミスは、国家によるインフォーマリティ創出の政治過程の分析に深く踏み込まなかった。ロイらは、資本によるジェントリフィケーションの経済過程の分析に深く踏み込まなかった。本稿は、それらを接合して、ジェントリフィケーションとインフォーマリティの関係の全体を射程に収める視座の必要を説いた。

スミスのジェントリフィケーション論も、ロイらのインフォーマリティ論も、無限に多様な現実の都市再編を一望に収めて説明する基本枠組を提示したものである。スミスもロイらも、詳細な実証研究に踏まえて議論を展開している。この先、これらの理論の隙間を発見し、埋めて、個別の都市再編を分析しつつ、その成果を都市理論へ昇華する、そのような作業が必要となる。スミスは産業国の都市再編に、ロイらは途上国の都市再編に軸足をおいた。しかし話は単純ではない。途上国のなかに産業国的世界があり、産業国のなかに途上国的世界がある。その双方をみるには、複眼的視座と比較の方法が必須となる。この課題を、実証研究に踏まえてどう実践するのか。筆者も、その課題に挑戦したい。

※本稿は、科学研究費の基盤研究（A）「グローバル都市の底辺層の構造と変容」（研究代表者青木秀男）による調査研究の成果の一部である。

[注]

1) 自治体は、国家機構の一部であり、国家の意思は、ほぼ自治体の意思である。という意味で、本稿では、国家・自治体を国家と表記する。
2) 空間をめぐる闘争は、政治・経済権力の地理的・社会的な再編の顕現としてある（Lund Hansen, 2006: 8）。L・ハンセンは、都市の権力闘争という視座のもと、空間をめぐる闘争をメタファーとして空間戦争と呼んだ。本稿もその語を用いる。
3) 筆者のグローバル都市の定義は、（青木, 2015: 93-97）をみられたい。
4) ジェントリフィケーションは、空間の占有者の交替を伴う。先住者が立ち退き、転出する。C・レマンスキー（Charlotte Lemanski）は、それを排除型の（exclusive）ジェントリフィケーションと呼ぶ（Lemanski, 2014: 2946）。他方で、港湾などの無住地も、ジェントリフィケーションの対象になる。それは、新規開発型（new-build）のジェントリフィケーションである。

5) ジェントリフィケーションのイデオロギーを徹底したものが、スマート・シティ（smart city）論である。スマート・シティとは、情報関連などの高度先端テクノロジーを用いて、都市の行政機構やインフラを効率的に管理し、サービスを効率的に配分して、持続的な発展をなす都市をいう。「技術的解決が万能とする都市開発モデルであり、そこに人間は登場しない」（Vanolo, 2014: 891）。スマート・シティは、資本が完全支配する都市である。

6) 資本の引揚げとは「建造環境からの絶対的あるいは総体的な資本の撤退」をいい、再投資とは、「それまで資本の引揚げを経験してきた景観や建造物への資本の回帰」をいう（Smith, 1996=2014: 317）。

7) M・カー（Marilyn Carr）とM・チェン（Chen Martha）は、フォーマリティ／インフォーマリティの分析には、二元論的、構造的、法的の3つのアプローチがあるとした（Carr & Chen, 2001）。二元論的アプローチでは、フォーマリティ／インフォーマリティが、二項対照的に分析される。構造的アプローチでは、フォーマリティ／インフォーマリティの分割の構造的背景が分析される。法的アプローチでは、フォーマリティ／インフォーマリティの法的定義をめぐるポリティクスが分析される。本稿はこのうち、構造的プローチについて考察する。

8) この項は、次の文献を参照して議論を行う。（Lombard & Rakodi, 2016）（Roy, 2005; 2009）（Rita & Shaw, 2012）

9)「ブラジルでは、都市の大部分は違法な土地占有からなる。合法的な土地所有権の侵害は、ごく普通の現象である」（Roy, 2009: 80）。国家は、違法な土地占有（ファベラ）を公認しないと、未知の（不気味な）人口を統制できない。

10) この項は、次の文献を参照して議論を行う。（Crossa, 2014）（Roy, 2009）

11) 2015年11月、マニラでAPEC（アジア太平洋経済協力）会議が開催された。そのとき、会場に通じる中心街路と、近くの公園の物売りが、一斉に撤去された。

12) この項は、次の文献を参照して議論を行う。（Arabindoo, 2012）（Roy, 2005; 2009）（Schindler, 2016）（Varley, 2013）

13) 「M・カステルとA・ポルテス（Castells and Portes,1989）は、フォーマル部門／インフォーマル部門という二重経済論を脱して、インフォーマリティを貧者と富者ともに関わる概念とした点で、革新的であった」（Roy, 2009: 83）。

14) この項は、次の文献を参照して議論を行う。（AlSayyad, 2004）（Kurtūst,2012）（Mcfarlane & Waibel, 2012）（Roy, 2009）

15) この項は、次の文献を参照して議論を行う。（Gandhi, 2012）（Keck, 2012）（Mcfarlane & Waibel, 2012）

16) インフォーマリティをミクロで行為的な過程概念と捉えて、諸アクターの行為（交渉）を詳細に分析する研究がある（Altrock, 2012: 188）。それにより、インフォーマリティの動的でフレキシブルな構築過程が、明らかになる。しかしそこには、マクロな空間分析がミクロな行為の分析へ還元されて、インフォーマリティを創出する構造的な権力の意思が看過される惧れがある。

17) この項は、次の文献を参照して議論を行う。（Cuvi, 2016）（Kreibich, 2012）

（Schindler, 2016）

18） これは、国家の構築主義的な理解である。それは、国家を行政部門間の相互作用の束として捉える。その視点は、動的でフレキシブルである。しかし同時に、そこには行政部門の意思を束ねる「権力の意思」がある。行政部門がどれほど対立し、分裂しようと、国家が、行政部門を束ねてフォーマリティ／インフォーマリティを裁定する権力であることに、変わりはない。

19） 適用不可能という点で、ジェントリフィケーション論も同じである。フィリピンのような、広範な土地を所有する地主が権力を牛耳る「弱い国家」（weak state）におけるジェントリフィケーションを、近代的な土地所有制のもとにある西欧都市のジェントリフィケーション論により説明することはできない（Choi, 2016: 577, 580）。

20） 筆者は、ホームレスネスの国際比較の方法を論じ、ホームレスネスの（世界共通の）一般性／（国ごとの）個別性をどう捉えるかについて考察した（青木, 2012）。

[参照文献]

Agamben, Jiorgio, 1995, *Homo Sacer : Il potere sovrano la nuda vita*, Torino: Giulio Einaudi Editore S.p.A（=2003 年『ホモ・サケル――主権権力と剥き出しの生』高桑和巳訳 以文社）.

AlSayyad, Nezar,2004,"Urban Informality as a 'New' Way of Life". In Roy, Ananya & N. AlSayaad, eds, *Urban informality: transnational perspectives from the Middle East, Latin America, and South Asia*, Lanham, Md.: Lexington Books, pp.7-30.

Altrock, Uwe, 2012, "Conceptualisation informality: Some Thoughts on the Way Towards Generalisation". In Mcfarlane & Waibel, eds, *Urban Informalities*, pp. 171-193.

青木秀男, 2012,「ホームレスの国際比較のための方法序説――フィリピン、日本、アメリカを事例に」青木秀男 5 号 128-149 頁

青木秀男, 2015,「『新労務層と都市底辺層』仮説――グローバル都市マニラを事例として」『理論と動態』8 号 92-108 頁

Arabindoo, Pushpa, 2012, "Bajji on the Beach: Middle-Class Food Practices in Chennai's New Beach". In Mcfarlane & Waibel, eds, *Urban Informalities*, pp.67-88.

Castells, M., and A. Portes,1989, " World underneath: The origins, dynamics, and Effects of the informal economy". In Portes, A., M. Castells, and L.A. Benton, eds., *The informal economy: Studies in advanced and less developed countries*, Johns Hopkins University Press, pp.11-41.

Carr, Marilyn and Martha A.Chen, 2001,"Globalization and the Informal Economy; How Global Trade and Investment Impact on the Working Poor", working paper, Women in Informal Employment: Globalizing and Organizing.

Choi, Narae, 2016, “Metro Manila through the gentrification lens: Disparities in urban planning and displacement risks”, *Urban Studies*, 53(3), pp.577-592.

Crossa, Veronica, 2014, “Reading for difference on the street: De-homogenising street vending in Mexico City”, *Urban Studies*, 53(2), pp.287-301.

Cuvi, Jacinto, 2016, “The Politics of Field Destruction and the Survival of Sao Paulo’s Street Vendors”, *Social Problems*, no.63, pp.395-412.

Demitas-Milz, Neslihan, 2012, “Urban Informality Reconsidered in a Neoliberal Context: *Gecekondu*, Identity, Poverty and Islamic Philanthropism in Turkey”. In Mcfarlane & Waibel, eds, *Urban Informalities*, pp.29-50.

Drummond, Lisa B, W., 2000, “Street Scenes: Practices of Public and Private Space in 13 Urban Vietnam”, *Urban Studies*, 37(12), pp.2377-2391.

Gandhi, Ajay, 2012, “’Informal Moral Economies’ and Urban Governance in India” in Context”. In Mcfarlane & Waibel, eds, *Urban Informalities*, pp.51-65.

Keck, Markus, 2012, “Informality as Borrowed Security: Contested Food Markets in Dhaka, Bangladesh”. In Mcfarlane & Waibel, eds, *Urban Informalities*, pp.111-127.

Kreibich, Volker, 2012, “The Mode of Informal Urbanization: Reconciling Social and Statutory Regulation in Urban Land Management”. In Mcfarlane & Waibel, eds, *Urban Informalities*., pp.149-170.

Kurtūst, Sandra, 2012, “Informality as a Strategy: Streer Traders in Hanoi Facing Constant Insecurity”. In Mcfarlane & Waibel, eds, *Urban Informalities*., pp.89-110.

Lemanski, Charlotte, 2014, “Hybrid gentrification in South Africa: Theorising across southern and northern cities”, *Urban Studies*, 51(14), pp. 2943-2960.

Lombard, Melanie & Carole Rakodi, 2016, “Urban land conflict in the Global South: Towards an analytical framework”, *Urban Studies*, 53(13), pp.2683-2699.

Lund Hansen, Anders, 2006, *Space wars and the new urban imperialism*, Sweden: Lund University.

Mcfarlane, Colin & Michael Waibel eds, 2012, *Urban Informalities: Reflections on the Formal and Informal*, Ashgate Publishing Ltd.

Mcfarlane, Colin & Michael Waibel, 2012, “Introduction: Informal-formal Divide in Context”. In Mcfarlane & Waibel, eds, *Urban Informalities*, pp.1-12.

Porta, Rafael La & Andrei Shleifer, 2014, “Informality and Development”, *Journal of Economic Perspectives*, 28(3), pp.109-126.

Raco, Mike. 2003. “Remaking Place and Securitising Space: Urban Regeneration and the strategies, Tactics and Practices of Policing in the UK”, *Urban Studies* 40(9): 1869-

Rita de Cacia Oenning de Silva & Kurt Shaw, 2012, “Hip-hop and Sociality in a

Brazilian Favela". In Mcfarlane & Waibel, eds, *Urban Informalities*, pp.129-147.
Roy, Ananya, 2005, Urban Informality: Toward an Epistemology of Planning, *Journal of the American Planning Association*, 71(2): 147-158,
Roy, Ananya, 2009, "Why India Cannot Plan Its Cities: Informality, Insurgence and the Idiom of Urbanization", *Planning Theory,* 8(1): 76-87
Schindler, Seth, 2016, "Producing and contesting the formal/informal divide: Regulating street hawking in Delhi, India", *Urban Studies*, 51(2), pp.2596-2612.
Scott, James C., 1985, *Weapons of the Weak: Everyday Form of Peasant Resistance*, Yale University Press.
Shin, Hyun Bang, Loretta Lees & Ernesto Lopez-Morales, 2016, "Introduction: Locating gentrification in the Global East", *Urban Studies*, 53(3), pp.455-470.
Smith, Neil, 1996, *The New Urban Frontier: Gentrification and the Revanchist City*, Routledge（=2014 年『ジェントリフィケーションと報復都市――新たなる都市のフロンティア』原口剛訳 ミネルヴァ書房）
Speak, Suzanne, 2013, "Alternative Understandings of Homelessness in Developing Countries", Global Urban Research Unit, Working paper no,49, pp.1-24.
Storper, Micha & Allen J. Scott, 2016, "Current debates in urban theory: A critical assessment", *Urban Studies*, 53(6), pp.1114-1136.
Vanolo, Alberto, 2014, "Smartmentality: The Smart City as Disciplinary Strategy", *Urban Studies*, 51(5), pp.883-898.
Varley, Ann, 2013, "Postcolonialising infoymaility?" Environment and Planning D: Society and Space, Network-Association of European Researchers on Urbanisation in the South (N-AERUS), 31(1) , pp.4-22.
Villamizar-Duarte, Natalia, 2015, "Informalization as a Processes: Theorizing Informality as a Lens to Rethink Planning Theory and Practice in Bogota, Colombia", RC21 Conference, *The Ideal City: between myth and reality*, pp.1-27.